

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370941

研究課題名(和文) ボルネオ民族意識形成へのキリスト教ミッション活動の影響に関する社会人類学的研究

研究課題名(英文) Social anthropological study on the influence of the missionary activities on the formation ethnicity in Borneo

研究代表者

石井 眞夫 (Ishii, Masao)

三重大学・人文学部・名誉教授

研究者番号：20136576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：イギリス、オランダによる植民地化以降ボルネオ社会は急速に変化してきた。開発と経済発展、キリスト教の導入によるイスラムとの宗教対立の構図、民族意識の形成など、こうした植民地時代以降の社会の本質的变化はしばしば「近代化」ないしはその結果と考えられてきた。本研究はこうした植民地期以降の社会変化にキリスト教諸教派の布教活動が大きな役割を果たしてきたことを明らかにした。境界の無いボルネオ島に国境線を引いた植民地支配は、集団の境界が曖昧だった社会生活にも分離分断をもたらし、民族という社会的境界を画定した。キリスト教会活動は民族集団と民族意識形成を中心的にない、ボルネオ社会の近代化に大きな影響を与えた。

研究成果の概要(英文)：The fundamental social change, so called "modernization" in Borneo societies was incurred by the colonial governments' policy but at the same time it was strongly influenced by the church missionary activities. Apart from the economic development, the formation of ethnic groups and ethnic identity was most important change for the societies where no explicit social demarcation existed. Such social demarcation was firstly brought by the colonial administration as a means to put ambiguous native societies in order, but the churches also emphasized the difference between "their christian society" and muslims or other churches. Through the activities of churches, peoples of Borneo unconsciously learn the difference of social groups on the daily basis. The conversion to christianity was to acquire a new life style, but it was to acquire new identification at the same time. The church activities have influenced and still influences strongly the ethnic awareness of Borneo societies.

研究分野：社会人類学

キーワード：社会人類学 キリスト教布教 民族意識 近代化 都市化 植民地主義 ダヤク ポスト・コロニアル

## 1. 研究開始当初の背景

東南アジア地域は十八世紀末より植民地化が加速し、欧米諸国は先を争って東南アジアでの植民地獲得を競った。本研究が対象とするボルネオは欧米人にとっては「危険な未開地」だったため植民地化が遅れ、十九世紀後半以降に植民地化と社会変化が急速に進行した。特に現マレーシア領(東マレーシア)のサラワク州、サバ州はイギリスの積極的植民地経営の結果、東南アジアの他地域に比べ急速な経済発展と近代化を遂げた、いわば「近代化に成功した地域」である。

このため、東南アジア諸地域に共通するさまざまな問題、少数民族問題や宗教対立、近代化と山地開発や山地の過疎化など近代化にともなう諸問題を共通に抱えるが、その一方で東南アジア他地域に先んじてこれら諸問題をさまざまな面から乗り越えようとする先進地域でもある。東マレーシアがたどった軌跡は、植民地期からポスト・コロニアル時代への東南アジア社会の変化のショーケースとして見ることもできる。

この点は、同じくボルネオ島で植民地化前は共通の文化的土壌を持っていたインドネシア領ボルネオ(カリマンタン諸州)との対比により鮮明となる。カリマンタン諸州はインドネシアの中でも開発が遅れ、首狩族オラン・フータン(森の住人)が住む未開地とされ、特に内陸山地は蛮人が住む危険地域と考えられてきた。スハルト時代に入り国内移民政策(トランスミグラシ)によって開発が進められて来たとは言え、「近代化」という視点からはマレーシア領ボルネオに大きく遅れをとっていると言える。

こうした較差は、勿論イギリス、オランダの植民地政策の相違と、植民地からの独立後のマレーシア、インドネシア両国家の政策の相違から来ているが、ではその政策の違いとは具体的にどのようなものだったのか。熱帯雨林と湿地帯に覆われた広大なカリマンタン開発の困難さ、オランダ植民地政府の開発に対する不熱心さとサラワク・ブルック政府の熱意など、さまざまな要因が指摘できるが、社会人類学的視点から見たマレーシア領(旧イギリス領)とインドネシア領(旧オランダ領)両地域のもっとも大きな相違は、内陸山地部住民の民族意識ないしは山地民意識の相違である。

東南アジアでは、大陸部でも島嶼部でも、内陸山地民は中央政府(植民地政府にせよ独立後の国家にせよ)にとって厄介者、トラブルメーカーで、程度の違いはあってもこの事実は今日でも変わりはない。内陸山地民は文化慣習を異にする強固な民族意識を持つ「少数民族」であり、反政府運動の温床である。また、大陸部では仏教、島嶼部ではイスラム教を中核とする中央政府の統治に対して、山地民は反仏教、反イスラムでもある。現代社会では山地民はしばしば中央政府に武力で反乱を起こす「反政府ゲリラ」でもある。

今日では、大河川流域から海岸部に住み、中央政府の中核をなす仏教徒ないしはイスラム教徒平地民に対して、内陸山地民の多くはキリスト教徒となっている。これは、住民の多数を構成する仏教徒ないしはイスラム教徒との宗教的軋轢を避け、キリスト教諸教派が山地民を中心に布教活動を行った結果だが、このことはキリスト教諸教会の布教活動が山地民の生活様式の変化、特に信仰・宗教生活の変化に大きな影響を与え、さらに山地住民、「少数民族」の民族意識の形成強化に大きな影響を与えてきたことを示唆している。

また、事実ポストコロニアル期に入ると、中央政府に対する「山地少数民族」の反政府運動は、平地民と山地少数民族との民族対立として激化し、さらに仏教徒とキリスト教徒、イスラム教徒とキリスト教徒との宗教対立としての様相が強く見られるようになる。

では、キリスト教会はどのような活動を行ってきたのか、あるいは意図的にせよ、無意図的にせよ、キリスト教会の布教活動は現代東南アジアの社会状況形成にどのような影響を与えてきたのだろうか。

本研究はこうした東南アジア社会の現状把握を背景に、従来から研究を進めてきたボルネオ諸地域を研究対象として、キリスト教諸教会の活動が、現代ボルネオ社会の形成にいかなる影響を与えてきたか、とりわけ山地民の民族意識形成にどのように関わってきたのか、またボルネオ社会の変化、あるいは近代化にどのように寄与してきたのかを、社会人類学的研究視点から明らかにしようとする試みである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、十九世紀中葉以降の植民地時代と1960年代以降の近代国家形成期を通じて、急速に「近代化」と呼ばれる社会変化が浸透するボルネオ諸社会で、山地民社会を主たる対象に活発な布教を続けて来たキリスト教諸教派の活動が「近代化」、とりわけ近代固有の社会現象とみられる民族意識と民族集団の形成にどのような影響を与えてきたかを社会人類学的現地調査を通じて明らかにすることを目的としてきた。

イギリス、オランダによるボルネオの植民地支配は、十九世紀半ばにイギリス人冒険家J.ブルックのサラワク入植以降に急速に浸透するが、それ以前のボルネオは世界第3位の広大な「島」であるにもかかわらず、比較的均質な文化的特徴を共有していた。東北はフィリピンへ、西北はマレー、マラッカ世界へ、南部は東インドネシア(ヌサ・トゥンガラ地方)へ、そして南西はジャワ方面へ連なり、それぞれからの政治的・文化的影響はあるものの、島周囲の平地部にはイスラム商人・水稲耕作農耕漁撈民が居住、内陸山地部には非イスラム焼畑農耕民が居住していた。

植民地時代を通じ、オランダはボルネオ島

のおよそ三分の二をしめる現カリマンタン諸州の領有権を宣言したものの、バリ戦争からスマトラ・アチェ戦争などインドネシアの反植民地武力抵抗に手を焼き、ボルネオの植民地開発・経営には不熱心だった。これに対して、ボルネオ島北部を支配したイギリス、特にサラワクを支配したイギリス人ブルック家は開発と近代化に心血を注いだ。その結果、インドネシア独立後もカリマンタン諸州は未開地のまま放置され、現在のマレーシア領ボルネオ(サラワク州・サバ州)とインドネシア領ボルネオ(カリマンタン諸州)の間に大きな較差を残すこととなった。しかし、両者の社会的相違は、こうした開発・近代化の較差だけではない。

ボルネオ島では山地民はダヤク(Dayak)と呼ばれ、このダヤク概念はボルネオ全島に共通するものである。「ダヤク」は祖オーストロネシア語まで遡れる、広く東南アジア島嶼部で共有される概念で、海の方位に対して内陸部、あるいは山地と山の方位、そしてそこに住む住民や生活様式を表す概念である。「ダヤク」はマレーシア領でもインドネシア領でも共通して使用される概念だが、植民地時代以降、その使用法や意味内容は異なってきた。インドネシア領カリマンタンでは「ダヤク」はジャワ人、スンダ人、バリ人などに対置する民族集団名称として使用され、地域ごとの文化的・言語的相違にもかかわらず、山地民自身が自らをダヤクと自己認識する民族意識を共有している。また、世界のマスコミ報道も現地の人々もダヤクを民族集団として認識している。これに対して、マレーシア領のサラワクとサバでは、ダヤクという概念は使用されるにしても、山地住民出身という漠然とした意味に用いられるだけで、民族集団への帰属としては、いわばダヤクの下位区分とも言える、イバン族、ビダユ族、カダザン族などの用語が用いられ、帰属意識もこれにともなっている。結果として、ボルネオの「民族分布地図」を作成すると、マレーシア領にはいくつもの小民族集団が細かく分かれて分布し、インドネシア領山地部にはダヤク族のみが居住するかのような分布図が出来上がることとなる。

ボルネオには元来は「民族」という概念はなく、西欧起源で近代固有の「民族」概念は植民地時代以降の植民地行政によってボルネオへ導入された概念である。現在の「民族分布状況」も植民地政府によるセンサス「民族集団別人口集計」や民族政策などの結果として出来上がったものである。サラワクでは当初、植民地支配に反抗的な人々は「海ダヤク」、従順な人々は「陸ダヤク」と呼ばれていたものが、二〇世紀初頭以降これがイバン族とビダユ族へと民族概念化して来たことが知られている。しかし、植民地政府に「民族集団を形成」しようとする積極的政策があったわけではない。また、植民地政府の政策と住民自身の民族意識形成とは別次元の問

題でもある。

旧イギリス領では、サラワクもサバも植民地政府は植民地経営の担い手として華人移民の導入に積極的だった。華人移民は出身地毎に集団としてボルネオに入植してきたが、こうした華人同郷集団を植民地労働力として導入する仲介エージェントの役割を果たしたのは、当時中国大陸南部で積極的に布教活動を行っていたキリスト教団だった。これまでの多くの研究から見過されてきた事実だが、東南アジアへの華人移民導入にキリスト教会が与えてきた影響は大きい。また、言語慣習を共有し、共通の利害で団結する華人同郷集団は、ボルネオの人々にそれまでの社会生活では経験したことがなかった「民族集団」のイメージを意識させることになった。

植民地社会へのキリスト教布教活動は、しばしば植民地支配の尖兵、あるいは在来文化・信仰体系の破壊者などと非難の対象とされることが多かった。勿論そうした否定的側面がないわけではないが、ボルネオに関する限り、オランダ植民地政府はキリスト教布教には消極的で、カリマンタン諸州への布教活動はむしろアメリカ系ミッションによって行われてきた。また、サラワク・サバでも植民地政府はイスラム教徒マレー人との軋轢を恐れ、布教活動には消極的だった。キリスト教会は欧米入植者への宗教的サービスや医療、教育のためであって、布教活動や布教地域は制限されていた。

キリスト教布教と植民地社会の変化、あるいは在来文化の変容についてはこれまでも多くの議論がされてきた。社会人類学の研究史では当初はキリスト教会の活動について否定的なものが多く見られ、その中では植民地化の過程での強引な布教や住民の受動的な外来信仰受容が強調されることもあった。しかし、1980年代以降はキリスト教信仰は必ずしも圧倒的力の差から押し付けられたものではなく、急激な社会変化に直面した住民自らが、新たな社会状況に積極的に関与しようとした側面を評価しつつキリスト教会活動の役割を分析しようとする視点も現れてきた。特にキリスト教がほぼ完全に浸透したオセアニア研究の中では、キリスト教会の役割は新たな視点から見直されようとしている。では、ボルネオではどうだろうか。

本研究では、こうしたボルネオ諸社会の現状と、植民地時代以降の社会変化ないしは文化変容に関わるキリスト教会活動への視点という社会人類学研究史の現状を踏まえて、植民地時代以降のボルネオ社会の変化、「近代化」にキリスト教会活動がどのような関わりを持ってきたのかについて、現地調査を行いつつ新たな視点から再考することを目的としている。

### 3. 研究の方法

本研究代表者は長年にわたりボルネオ、中でもサラワク研究に従事しており、その民族

意識形成と社会変化、特に都市化の進行には大きな関心を寄せてきた。ボルネオでは一般に海岸平地部ではイスラム教徒が多数を占める。マレーシア領ではマレー人やブルネイ人、インドネシア領ではジャワ人、スンダ人、マドゥラ人、プギス人などである。これに対して、キリスト教会が主たる布教対象とした内陸山地部ではキリスト教徒が卓越すると考えられてきた。従って、近代化と都市化、民族意識の形成を対象とする研究の中では、山地部を中心に行われたと考えられてきたキリスト教会活動の重要性について等閑視する傾向があった。しかし現実の教会活動は都市教会あるいは布教センターを中核としたネットワーク網によって行われており、教会活動情報もむしろ都市部の中核教会、布教センターに集約されている。

本研究では、サラワク植民地政府の公式記録として十九世紀末から残されているサラワク・ガゼットを見直し、教会活動の実態と植民地政府との関わり、植民地政策と布教活動についての資料を収集することからはじめた。

また、ボルネオでのキリスト教布教に関する歴史資料は、サラワク州立図書館に未整理のまま残されており、またサラワク州アーカイブスの機能を果たすサラワク博物館図書室に多く残されている。同様にサバ州についてはサバ博物館と州立図書館にも多くの記録が残されている。また、イギリスの東南アジア植民地経営の中心地でボルネオに隣接するシンガポール国立図書館とシンガポール国立アーカイブスに東南アジア植民地資料と教会活動に関する資料が残されている。東南アジアでのキリスト教会活動の研究はシンガポール・トリニティ神学大学が中心となって進められており、多くの資料が公刊されている。なお、カリマンタン諸州での教会活動に関する資料は公的機関ではほとんど収集されておらず資料は極めて乏しい。本研究ではこうした歴史資料を収集し、本研究に即した視点から見直しつつ分析を進めた。

これら資料の収集分析の側ら、社会人類学的現地調査は計三回実施した。調査は資料入手の効率からサラワク州とサバ州を中心に行ったが、主たる調査は、民族協会への聞き取り調査、教会活動の中心となっている都市部の中核教会での資料収集と聞き取り調査、各地教会の活動と住民意識把握のための村落調査である。

民族協会活動は特に1990年代以降、民族意識の高まりとともに活発化しているように見える。民族協会は華人同郷会に倣うことから始まったと推定されるが、山地民系民族協会はほぼすべて熱心なキリスト教徒であり、地方選挙で重要な役割を果たしている。

都市部の中核教会の多くは長い歴史を持ち、宗教書とともに活動記録、布教史などに関する書籍、ニュースなどを多数公刊している。これらの資料はボルネオでのキリスト教

会活動の意義を考察する上で重要な資料となっている。教会関係者は、植民地時代には外来者(主に欧米人)が中心だったが、独立国家成立後はこうした、いわゆる宣教師の多くは追放され、二〇世紀後半以降の教会活動の主たる担い手は現地の人々である。彼らはキリスト教会活動を通じて、彼ら自身の手により、草の根からのボルネオの近代化と発展に尽くしてきたと考えており、キリスト教会活動が果たしてきた役割の重要性に強い自負の念を抱いている。

ボルネオ山地民は、マレーシア領、インドネシア領ともに山地民村落はほぼすべてキリスト教化されている。各村落には教会堂があり、村民はここで礼拝を行う。本研究では現地調査の折には出来る限り多くの村落教会を訪ね、住民のキリスト教への意識と民族意識について尋ねることとした。

こうして得られた文献資料、現地調査資料をもとに、植民地時代以降の社会変化と近代化を通じて作り上げられてきた「多数の民族からなる現代ボルネオ社会」の形成にキリスト教会の活動がどのように関わってきたかを分析、考察してきた。

#### 4. 研究成果

東南アジア研究者の間では古くから、島嶼部住民を原マレー人(プロト・マレー)と新マレー人に二つに分類できると信じられて来た。この分類は人種的特徴と東南アジアへの移住時期の新旧にもとづいているとされ、一部の研究者間では現在でもまことしやかに語られることがある。住民をこのように分類できるとする幻想の背景には、植民地期に出来上がった東南アジア島嶼部住民に対するステレオタイプがある。ボルネオでは、原マレー人とは内陸山地民ダヤクを指し、新マレー人とはイスラム教徒のマレー人、ジャワ人など「新来の住民」と信じられて来た人々を指す。新マレー人とは進歩した農耕様式(灌漑水稲耕作)技術を持ち、大宗教イスラムを信仰する文明人で、原マレー人ダヤクは“未だに”原始農耕(焼畑農耕)に従事し、残虐な首狩慣行を持ち、原始的迷信にしがみついた野蛮人、というイメージである。

今日では、人種的相違や移住時期の新旧は否定され、また水稲耕作技術は決して新しい技術ではないことが認められているが、本研究の過程では、こうした民族分類の原形や住民に対する紋切り型のイメージは、植民地化進行と共に欧米人の間で作り上げられたものであり、従ってキリスト教布教活動とも深くかかわっていることが明らかになった。

海岸部住民と内陸山地民の相違は、居住環境への生態的適応の結果生み出された生活様式の違いから来るもので、水稲耕作と焼畑耕作の相違も生態環境への適応様式の相違である。イスラム教は東西交易路に沿って海岸部から、主として商人の間に拡がって行ったものである。

今日では民族集団名として一般的に使われている「マレー人(MalayないしはMelayu)」もイギリス植民地支配の拡大とともに、おそらくサラワク政府行政官によってシンガポールからボルネオへ伝えられ、外来欧米人の間で使われ広まった概念である。実際、今日でもブルネイやサバ州ではマレー人とは言わずにブルネイ人といわれることが多い。また、インドネシア領カリマンタンではいずれもイスラム教徒であるジャワ人、プギス人、マドゥラ人などとの対比として、出自が明らかでないイスラム教徒住民をマレー人と呼んだりする。要は海岸部住民も山地住民ダヤクも生活様式の違いで、両者は相互浸透的で本質的な違いはなかった。

この状況は、植民地期のキリスト教布教とともに徐々に変質する。植民地政府は宗教対立を恐れ、イスラム教徒へのキリスト教布教を禁じ、またキリスト教会も山地「野蛮人」への布教救済を望んだ。教会の意図にかかわらず、山地民ダヤクへのキリスト教導入は宗教対立と民族分類の基礎を作った。社会秩序確立のため平地民マレーと山地民ダヤクの居住地を分離しようとしたサラワク植民地政府の政策はこうした住民観に基づくもので、ボルネオ民族分類の基礎を作ることとなった。

ボルネオへの最初のキリスト教布教はイギリス国教会(Anglican、聖公会)によるものだが、当初はボルネオ住民への布教ではなく、植民地イギリス人への宗教的サービスと医療、教育を目的としたものだった。ほどなくローマン・カソリック教会も布教を始めるが、教会間の対立を恐れたサラワク政府は両教会の布教許可地域を厳格に分離した。聖公会の布教地域は、植民地政府に従順な「陸ダヤク」とし、カソリック教会の布教地域は、当時は未だ未開地域だった内陸部の「海ダヤク」として内陸開発に利用しようとした。今日では「陸ダヤク」はビダユ族、「海ダヤク」はイバン族と呼ばれるが、そのような民族があらかじめ存在したわけではなく、こうした植民地政策とキリスト教布教の結果として二〇世紀前半に誕生した「民族」である。

同じく旧イギリス領だったサバ州でも似たような経過をたどる。布教地域が厳格に区分されたわけではないが、両教会は「民族集団」を対象として布教活動を行い、結果として「民族集団」は現実の集団として民族意識を醸成することとなった。また、旧オランダ領だった、現インドネシア領カリマンタンではオランダ植民地政府が開発に不熱心だったこともあり、キリスト教布教では目立った活動はなく布教成果も確認できなかった。このことは、カリマンタンではインドネシア独立後も山地民は今日にいたるまで長く「ダヤク」のまま民族集団が形成されなかったことと関連する。インドネシア地方政治の中では、カリマンタン山地民は現在でもすべて「ダヤク族」である。

ボルネオのキリスト教徒で多数を占め、また現代のキリスト教会活動で重要な役割を果たしているのは華人移民の子孫たちである。特に都市部ではキリスト教会活動の中心は華人系住民である。華人系住民とキリスト教会の密接な関係も従来の諸研究の中では看過されてきた。キリスト教会は華人のボルネオ移住を仲介しただけでなく、移民後も華人移民の精神的支えとなり、医療や教育でも重要な役割を果たしていた。また、華人同郷集団は特定のキリスト教派と強い結びつきを持つことが多い。例えばメソジスト教会は福州人が中心になっている。こうした、華人同郷集団と教派との結びつきはマレー半島でも見られ、イスラム教徒が多数を占める半島部マレーシアではキリスト教会活動は華人系マレーシア人が中心となっている。

山地民の民族意識形成、とりわけ山地奥深くに住む少数集団の民族意識形成と社会変化、近代化に大きな役割を果たしたのは「ボルネオ福音伝道教会(Borneo Evangelical Missionary、略称BEM)」である。オーストラリア人宣教師によって結成され、ボルネオ山地の「未開民族」への福音伝道を目指したこの宣教師集団は1930年代からサラワク、サバと東カリマンタンの内陸奥地への布教を開始した。この地域では現在でも人々は国境をまたいで自由に行き来しており、地理的にも社会集団という点でも「境界」が曖昧な地域で、「民族集団」は曖昧である。

BEMが大きな布教成果をあげたのはカリマンタンやサバと国境を接する北部サラワク内陸奥地で、太平洋戦争後この地域の村々ではキリスト教への集団改宗が進み、今日では最も熱心なキリスト教徒でもある。その後、BEMはオーストラリア人宣教師が引き上げ、教会はSIB(マレー語Sidang Injil Borneo「ボルネオ福音協会」の略)に名称を改めて土着化した。後を継ぎ今日まで布教活動を続けているのは現地山地民出身の人々で、現在は北部ボルネオで最も強固な教会組織としてサバ州、カリマンタンからマレー半島まで布教活動を拡大している。

北部サラワクに多くの少数民族集団が現れ、マレー人やイバン人といった規模が大きく優勢な民族集団に対して「オラン・ウル(上流域の人々)」として政治的まとまりを作り上げるにいたるには、こうしたキリスト教布教活動が大きな役割を果たしてきたと考えられる。

本研究を通して、今日のボルネオ社会、とくに民族集団の形成や民族意識の形成にキリスト教会活動が重要で本質的役割を果たしてきたことが明らかになった。植民地社会、とりわけ植民地期以降の東南アジア社会の変化にキリスト教の布教が大きな意義を持って来たことは十分に考えられることだが、民族集団形成や民族意識形成、さらに民族間関係にどのように関与してきたかについての研究はほとんどなく、大方の研究が看過し

てきた視点である。

ボルネオ諸社会にとって、植民地時代以降の社会変化とは、地理的にも社会的にも境界の無い、流動的で曖昧な社会の在り方が変化し、社会集団の分離と分類によって社会的境界が設定され、諸集団の利害対立とその調整によって構成される「現代社会」の形成されたことだった。そしてその社会変化、「近代化」をもたらした重要な契機の一つがキリスト教諸教派による活動だった。

本研究で取り上げたボルネオ社会は、東南アジア社会の近代化とキリスト教布教について考察する上での典型的事例と考えられ、今後の研究を通じて多くの比較事例が蓄積されることが望まれる。また、そうした事例の比較研究を通じて、人類社会にとって「近代化」とは何かについて考えるための有力な民族誌事例となるであろうと期待できる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

石井眞夫 「北部ボルネオの近代化とキリスト教諸教派の活動」人文論叢 第32巻、査読無、pp1-14、2015

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

石井眞夫 (ISHII, Masao)

三重大学・人文学部・名誉教授

研究者番号：20136576

(2)研究分担者

なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ( )

研究者番号：